

## 雛の誕生—雛節供に込められた対の豊穰—

皆川美恵子（著）（2015年2月，春風社）

平等院ミュージアム鳳翔館学芸員 花園大学非常勤講師 京都造形芸術大学非常勤講師  
田中 正流

本書は、児童文化研究の一貫として全国の雛や雛行事を見て歩いてきた皆川美恵子氏の長年の研究成果のみならず、日本人形玩具学会会員諸氏を中心とした歴史学、国文学、民俗学等の研究成果をまとめた書籍でもある。

今日では当たり前のように毎年三月三日に男雛と女雛を飾って雛祭りが行われている。一般家庭はもとより各地の雛イベントや美術館・博物館の展示なども近年では盛んである。しかしその本質を正しく理解して開催しているところはどれほどあるのだろうか。どこでも雛祭りとは女兒の健やかな成長を祈るための行事であるなど通り一遍の説明がなされているだけではないだろうか。

この「雛」とは何かという根本的な問題を明らかにするため、皆川氏は様々な文献史料を縦横無尽に駆使し、古代から現代までの「雛」にまつわるあらゆる歴史や文化を一つ一つ整理して複雑に絡み合った雛の本質を一本一本紐解こうとしたのである。その作業は膨大で複雑なことは想像に難しくなく、それをやり遂げたことは同じ研究者として敬服の限りである。

さて本書の構成は、導入として前書きを置き、以下は五章立てであり、終章または結論というべき章は配置されずに、各章ごとにまとめられている。

第一章では、三月三日に注目し、雛が登場するより以前に行われていた古代中国伝来の曲水の宴や鶏合（闘鶏）の紹介から始まる。特に闘鶏は古代から近世にかけて貴賤を問わず熱中した年中行事であったが、それに代わるようにして雛節供が

江戸時代になって盛んになったのである。またこれまでの通説では京都発祥とされてきた雛節供であるが、資料を紐解くと京都ではまだ年中行事として位置付けられていない頃から江戸ではいち早く定着していたことなど興味深い論考も紹介されている。

このことを考察するため第二章では、平安時代に戻り、公家社会に登場する「ひひな（雛）」とよばれる人形や穢れを祓うための「ひとがた」という日本人形史における人形の二つの源流についての文献が紐解かれていく。またその二つの流れの両方に関わってくる「天児（あまがつ）」の実態についても言及されている。

第三章ではいよいよ雛の誕生である。中世から近世にいたる雛や人形に関連した事柄を日記類などから抜き出すと、立雛から坐雛への変遷や雛道具の充実してくる様子などが見て取れる。また女兒の成長を祝うという雛節供の祝儀がやがて嫁入り道具となってくることも史資料から明らかにされていく。

第四章ではさらに論を進めて結婚と出産を題材に、雛や雛道具の呪術性だけでなく様々な雛飾りの諸相にまで論は展開する。サブタイトルとなっているように、対となる男女の雛には将来の理想的な夫婦像を求めただけではなく呪的な豊穰性をも込められているのである。

最終章では明治時代に新政府によって旧暦から新暦への改暦や五節句の廃止など急激な西洋化が推し進められた中で現代に繋がる雛の東西の展開が紹介されている。大正時代に雛の研究が深まっ

たが、現在まで誰も深く検証することなく定説となっていることも多く注意を促している。最後に雛の現代として美術館や博物館での雛展示や雛祭りや雛供養のイベント化にまで触れるなど、雛にまつわる事柄をあますことなく網羅している。

本書は文献資料を多数引用して論を展開してい

るため、本文はもちろんのこと註の充実こそ見事といえる。そのため研究者やこれから雛の勉強を始めようとする学生だけでなく、雛イベントや博物館などで雛を展示する担当者にこそぜひ読んでいただき、正しい雛文化の継承に役立ててもらいたいものである。